借金のせいでＶＩＰ専用の特別娼館で働くことになりましたが、毎日調教されてとても幸せです♡

大和　ソウ

1.初めての調教

2.ピアスの罠

3.宝石の戒め

4.華の集い

5.狂宴

1　初めての調教

とある場所に、有力者等世間的に権力を持った人物しか利用できない娼館がある。

客層は十代から五十代までの幅広い年齢層が訪れる。お忍びでくる政治家や、企業の社長、はたまた芸能人、その子供たち――――。

大きな館を模した建物は広い敷地内に建っている。一見普通の別荘地に見えた。

しかし完璧すぎるほどセキュリティの整った敷地は容易に入ることは叶わず、覗くことも不可能だ。あらかじめ取引が決められたものしか入場することが出来ない。

ここ、高級娼婦館『花苑（はなぞの）』で働くことになった私は、丁寧な指導を受けてようやく店に立つことを許された。

ここに勤めることになった経緯は話せば長くなるが、あまりいいものではない。有り体に言えば身内の借金のせいで身売りする羽目になってしまった、という理由だ。

まだ二十代半ばの私は当然、娼婦として働くのは初めてだ。
だがありがたいことに、花苑はきちんとした研修があり、給料もあった。もちろん、ボーナスも。働きに応じてお金が貰える。一般的な接客業と変わらないシステムだ。
花苑の接客研修は非常に丁寧なものだった。
ここに来る人間は少々特殊な人物が多く、名前の知られた者が多いそうだ。それゆえ従業員は接客技術に特化して覚えさせられる。
特別な人間の接客を任された特別な娼婦達。なんだか自分には縁がないように思えるが、入店時、「花苑に入れる時点で、ある程度の美貌と素質は持っている」と言われた。
むしろその「素質」こそがここで働けるかどうかの大きな割合を占めているという。
どうやら、私にもその素質があったらしい。

花苑のシステムはとても簡単だ。お客様は何人もいる娼婦の中から好きな女性を選ぶ。娼婦にはそれぞれ得意なプレイがあり、性格なんかもある程度知らされる。気に入った娼婦を選んだら、娼館とお客様の間で契約をする。あとは好き勝手していい（もちろんルールはあるけれど）。

調教するもよし、奴隷にするもよし、ノーマルセックスを楽しむもよし、皆それぞれの性癖を楽しんでいる。

ただ、普通の風俗店と違う点が一つだけある。それは、契約したらお客様はその娼婦しか買えない、つまり専属契約になるという点だ。

もちろん、合わないこともあるので契約破棄することもできるが、基本は契約破棄しない限りずっとその娼婦と遊ぶことになる。

これはお客様に安心してプレイを楽しんでもらい、娼婦の負担を減らし、一人のお客様のために必ずベストな接客をするために作られた特別なシステムだ。

私達娼婦は買ってくださったお客様を悦ばせなければならない。それが仕事。

私の部屋にある電話が鳴った。従業員しか使わない連絡用の内線電話だ。電話を取ると、受話器のスピーカーから男性スタッフの声が聞こえてくる。

『君の契約が決まった。準備を整えて睡蓮の間に行きなさい』

「こんなに早くですか……？」

まだ入店して間もないのに、もう契約が決まったとは驚きだ。

『入りたての女の子の方が早く声がかかるんだ。初々しいし、調教したい人が多いから』

調教、そう聞くとぞくっとする。

新人研修の教官に見出された私の得意なプレイが、「調教」だった。もちろん、する方ではなく、される方。元々M気質だと自分でも思っていた。まさか教官にまで見抜かれるとは思わなかったけれど。

制服である丈の短いワンピースに着替えた私は、お客様が待つ睡蓮の間へと向かう。

館にはいくつも部屋があって、それぞれ客の趣向に合わせて作られている。

だが、部屋にはベッドはもちろんのことバスルームやベランダもあって、普通の家と変わらない部分もある。

睡蓮の間は、いわゆるノーマルプレイの部屋だ。最低限のプレイが楽しめるように何点か道具も用意されているが、特殊なものは置かれていない。

だからきっと、私の契約者はソフトな調教を楽しみたいのだろう。

――――どんな人なんだろう。いい人だといいんだけど……。

睡蓮の間にたどり着く。ドアを開けると、一人掛けの大きなソファに腰掛けた人物が見えた。

品のいい色の細身なスーツと、綺麗な革靴。さらりとした黒髪。格好はサラリーマン風。多分どこかの会社の社長だろう。

男性は座ったまま足を組んで舐めるように私を見つめた。

「お前か？」

鋭い声だった。思わず命令に従ってしまうような、そんな声。

こっちに来いと言われ、私は初めてのお客様に恐る恐る近付く。

――――綺麗な人。それが第一印象だった。

もっとハゲたおじさんを想像していたけれど、全然そんな感じじゃない。

お店の支配人から、「うちのお客様は品がいいから安心していいよ」と言われたけれど、どうやら本当だったらしい。

「こっちに来い」

一つ目の命令が下された。私はゆっくりと、男性に近付く。

「お前の紹介文に……色々書いてあった。調教を……したことがあるのか？」

「あ……いえ。初めてです。お店の研修で、そう言われて……」

娼婦をお客さまに公開する際、ある程度の情報も一緒に見せられる。その娼婦がどんな性格でどんなプレイが出来るか。どんなプレイがＮＧなのか。お客様は顔だけでなく、そこも見て契約を結ぶ。

私の紹介文には「調教可」と書かれている。ひどい痛みさえ伴わなければ、大概のことをオーケーしていた。その方が基本給が増えるし、お店からもらえる手当も増えるからだ。この旦那様はそれを信じ、私と契約を結んだのだろう。

「じゃあ、調教は初めてなんだな」

もしかしてガッカリされているのだろうか。調教は特殊な性癖だから、オーケーしている娼婦は少ないと聞く。この男性も、わざわざ探していたのかもしれない。

「……初めてですが、大丈夫です。ちゃんと研修も受けました」

その一言で納得したのか、男性は「分かった」と言った。

男性から求められる多くのプレイは研修時に教わっている。娼館で一番やってはいけないことの一つが「旦那様を拒むこと（否定すること）」だからだ。だから店側もあえて娼婦の得意不得意を公開するようにしていた。

「脱げ」

二番目の短い指令。私はワンピースの肩紐をゆっくりと下ろした。元々下着は付けていないから、すぐに裸体が剥き出しになる。

「咥えろ」

三つ目の指令。その言葉だけでなんのことがわかる。私は四つん這いになり、おずおずと彼の下半身に近づく。

近くに行くと、香水の匂いがした。シトラス系の爽やかな香りに思わず吸い寄せられる。

パンツスーツのジッパーを下ろし、ボクサーパンツの中から少し硬くなったペニスを取り出した。大きなペニスだ。独特の匂いをさせながらそそり立っている。

私は研修で教わった通りに最初は口の先でペニスの先っぽをくちゅくちゅと舐めた。

艶のある先端の穴をぐりぐりと舌を入れ込むように喰むと、ピクピク震える。

「つく……」

溜まっていたのか、旦那様は意外にも早く射精した。

舌の中で震えるペニスを、男は頭をぐいっと持って口を離させると、半開きになった口をよく見せろと言った。生あたたかい精液が口一杯に溜まり、ゆらゆらとゆらめいている。

「飲め」

四度目の指令。私はその白い粘液をごくりと飲み込んだ。

――――お客様の命令を拒んではならない。

店の決まりごとの一つだ。一度店頭に出されれば、その時から私達は旦那様の物なのだから。

喉の奥に苦いものがじんわりと流れ込み、口を開いてそれを全て飲み込んだことを証明してみせる。

「仰向けになれ。脚を広げろ」

旦那様の命令は続いた。

私は命令通り絨毯の上に寝転び、旦那様の前でゆっくりと脚を広げて見せた。パンツは履いていないからすぐにアソコが丸見えになる。

いくら研修を受けた私でも、こんなことをされるのには慣れていない。旦那様の視線はそのまま何分もそこに注がれ、私は恥ずかしさで死んでしまいそうだった。

やがて、旦那様は言葉もなく椅子から立ち上がると、部屋にあったチェストの引き出しを開けた。その中に道具が入っていることは私も知っている。

小さめのピンクローターを数個取り出すと、旦那様はそれを持って私の陰部に近付けた。

「あっ……」

既にある程度濡れた膣内に、小さなローターを一つ押し込んでゆく。一個、二個と、最終的には五個のローターが私の体内に入った。

こんなに沢山のローターを入れられて大丈夫なのだろうか。不安になる私をよそに、旦那様はローターのスイッチを入れた。

「あっ♡あっ♡いやぁぁっ♡動いてる♡」

ヴィーンと鈍い音を立ててローターが動く。

五個ともなれば互いの振動が響き合って膣内への快感が半端ではない。精一杯脚を広げながら耐えたが、我慢は長く続きそうになかった。

ヴヴヴヴヴヴ♡ヴイーン♡ヴイーン♡
「ご主人さまぁ……っ♡止めて下さいぃ♡」
「駄目だ。口答えしたらもう一個増やすぞ」
「ああっ♡いやぁぁあ♡ダメェッお願いぃぃっ♡」
「躾のなってない女だな」
旦那様は引き出しから更に数個のローターを持ち出した。
前触れなくそれを私の膣にねじ込み、すかさずスイッチを入れる。私はさらに甲高い嬌声をあげて痙攣した。
「いやぁぁぁぁ♡とめてぇ♡とめてぇぇッ♡おまんこおかしくなるからぁ♡」
「口答えした罰だ」
「アァァッ♡だめぇッ♡おかしくなる♡」

「淫乱な女だ。すっかり汁まみれだな」
「ひぃっ♡いやぁぁあんっ♡」
振動は激しさを増す。体の奥からゾクゾクしたものが込み上げて、私は耐え切れずに達してしまいそうになった。
だが、旦那様の許可なく達するのはこの店ではあまり良くない行為だ。
我慢しなきゃ♡我慢しなきゃ♡そう思うが、快感はすでに限界だった。
「ご主人さまっ♡おねがいです♡イかせてくだしゃいっ♡もう、げんかいです♡」
「早いな。まだ十分も経ってないぞ」
「ごめんなさぃぃっ♡もう、おまんこおかしくなりそうなんです♡許してください♡」
「しょうがないな」

男は振動を続けるローターのコードを掴むと一気に引き抜いた。ジュプッ♡と激しい水音がして、ローターが汁を撒きながら引き抜かれる。

それがまた快感を引き起こして、私はついに達してしまった。

「あ…ぁ…もう、だめぇ……♡」

「よく見せてみろ」

「あ……♡」

力の抜けた脚を大きく開かせられて、私の膣が丸見えになる。中心からはヌルヌルとした液体が溢れていた。

快感によって愛液まみれになったそこを旦那様はじっと凝視した。

———勝手にイって怒ってるのかな。旦那様の言うこと聞かなかったから……。

旦那様は無表情のままだ。だが、怒っているわけでもないようだった。

「……お前の源氏名は『カレン』だ」

「……カレン？」

店の娼婦は契約する旦那様が決まると、名前を貰える。いわゆる「源氏名」だ。どうやら、私の源氏名が決まったらしい。

「お前は俺が買った。これから調教してやるから覚悟しろよ」

私は「はい」、と力なく答えた。私はここで働かないといけない。それしか借金を返す方法がない。

今までは少し悲観していたけれど、考えようによっては、気持ちいいことをしてお金がもらえるんだから悪いことではないのかもしれない。

考えるだけ無駄だ。私は今日この旦那様のものになったんだから。

視姦されて、また秘部から愛液がジワリと滲んだ気がした。